社会の課題へのよりよい解決策を考える子どもが育つ社会科学習

名古屋市立北一社小学校教諭　　勝　田　洋　光

Ⅰ　研究のねらい

急速なグローバル化や多極化の進行に伴い、現在学校で学ぶ子どもたちが社会の中心となって活躍する2040年代は、「VUCA」と称される先行きが不透明で予測が困難な未来を迎えようとしている。このような時代に対応するには、様々な変化に積極的に向き合い、直面する課題の解決策を考えることのできる子どもを育てる必要がある。私の考える「社会の課題へのよりよい解決策を考える子ども」とは、社会の課題に対して、既存の解決策で本当に解決できるかどうかを評価し、課題に関わる立場を踏まえて、複数の視点でよりよい解決策を考えることのできる子どもである。学習指導要領では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力を養う。」と明記されており、厳しい時代を生き抜くために、予測困難な課題に対しての解決策を考えることのできる力の育成が求められている。

また、筑波大学教授唐木清志氏は、考えを適切に伝える表現力や思考力がこれからを生きる児童生徒にとって必要不可欠な能力であるとし、問題解決的に考える学習の展開が重要であると述べている。社会科の学習を問題解決的に進める中で、課題への解決策が真に解決できるかを子どもが考え、よりよい解決策を考えられるようになることが必要であると考える。

そのような社会科の学習を実現するために、私は、エドワード・デボノ氏が提唱した思考法に着目した。この思考法は前提を疑い、見方を変えることで、よりよい解決策を見いだす思考法である。

予測が困難な時代を生きる子どもたちが、このような思考法を用い、社会の課題に対してよりよい解決策を考えることは、問題解決能力の育成という、公民としての資質・能力の基礎を養う社会科の目標に迫る点において意義がある。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の対象　名古屋市立北一社小学校　第６学年　38人

２　基本的な考え

主題に迫るためには、いくつかの段階を踏まえて学習をする必要がある。そのために、まず、子どもたちが社会の課題を捉え、課題が現在の取組で解決できるかを評価する。そして、現在の取組について、評価を基に他者との話合いを通して捉え直し、よりよい解決策を考えられるようにする。そこで、「社会の課題を把握する」「社会の課題への取組を追究する」「社会の課題への解決策を考える」の３段階の学習過程を設定し、社会の課題への取組を複数の視点で評価する活動と、よりよい解決策を考えるために話し合う活動を取り入れ、学習を進めることにした【資料１】。

段階	主な学習活動
社会の課題を把握する	①　社会の課題を知り、社会生活への影響を調べる。 ②　社会の課題への取組について予想する。
社会の課題への取組を追究する	③　社会の課題への現在の取組について調べる。 ④　現在の取組について「良い」「残念」「気になること・疑問」の評価をする。
社会の課題への解決策を考える	⑤　取組の改善点を見いだす。 ⑥　複数の手順に従って改善点を克服できる方法を意見交流する。 ⑦　意見交流を基にして、課題のよりよい解決策を考え、まとめる。

【資料１　基本的な学習過程】

(1) 社会の課題を把握する段階

学習内容に関わる社会の課題を知り、将来を含めた社会生活への影響について調べるようにする。そして、社会の課題に対する現在の取組を予想することで、学習への見通しと追究する視点をもつことができるようにする。

(2) 社会の課題への取組を追究する段階

社会の課題に対する現在の取組について、取組への見方を変えるために「本当に解決できるのか」という前提に立って調べる。調べて明らかになった取組の内容の中から、評価していく取組を選択し、PMI シートを使った評価を行う。現在の取組の改善の可能性について考えることができるように、課題に関わる立場ごとに、「P（良い点）」「M（残念な点）」「I（気になること・疑問）」の三つの項目で評価する【資料２】。これまでの実践では、三つの評価項目のうち「I（気になること・疑問）」の項目についての評価ができず、改善点を踏まえた解決策を考えることにつなげられない子どもが見られた。そこで、PMI シートを使って、現在の取組がどの立場にとってどのように評価できるかを検討し合う学習活動（「評価会議」）を行う。

社会の課題への現在の取組	立場	P（良い点）	M（残念な点）	I（気になること・疑問）
子育て支援アプリ	家庭	・緊急の場合の対応を知ることができる。 ・子どもの成長記録を管理することができる。 ・子育て家庭優待カードを使用できる。	・認知度が低い。 ・相談窓口の紹介だけで、アプリ内で相談できない。	・近くに遊べる施設などがあったらそれをお知らせできる機能はできないか。 ・家庭優待カードを持ち歩かなくてもいい。
	行政（市）	・子育てへの不安を減らし、出生率を上げることにつながる。 ・アプリを通じて多くの企業を子育て支援につなげることができる。	・利用率が低い。 ・使いづらさがある。	・子育てが不安な人に市から情報を送ることができる。 ・なぜ利用率が低いのだろう。

【資料２　PMI シートを使った評価】

(3) 社会の課題への解決策を考える段階

社会の課題に対する現在の取組について、学習で得たことや、「評価会議」で見いだした改善点などを基に、よりよい解決策を考える。その際、思考法「シックスハット法」を取り入れた手順に沿って活動を展開する。手順は、色ごとに活動内容を決め、色が指定している活動のみを行って展開する。シックスハット法では、肯定的な意見や否定的な意見など様々な考えを同時に述べることはないため、話合いそのものがまとまらなかったり、まとまるまでに時間が掛かったりするような事態を起こさず、効率的かつ生産的に交流することができる。これまでの実践では、手順を踏まえて考えた解決策が、どの課題の解決につながるのかを具体的に捉えている子どもが少数にとどまった。手順の中に、解決策を考えるという目的や検討する場全体を俯瞰する機会に欠けていたため、手順そのものを工夫する必要があることが明らかになった。そこで、課題に対して、立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができるようにするために、手順に全体を総括する活動を加え、よりよい解決策を考える学習活動（「未来会議」）を行う【資料３】。

【資料３　「未来会議」の手順】

3　授業研究を通して明らかにしたいこと

(1)　「社会の課題への取組を追究する」段階において、PMI シートを活用し、評価会議を行うことは、現在の取組について、立場を基に三つの項目の評価をする上で有効か、評価会議における PMI シートの記述内容からつかむ。

(2)　「社会の課題の解決策を考える」段階において、課題の解決策を考えるために、未来会議を行うことは、社会の課題に関わる立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を考える上で有効か、会議後の学習プリントの記述からつかむ。

Ⅲ　子どもの実態

1　調査日　　５月 18 日～６月１日

2　調査方法　　質問紙法、授業の記述分析

3　調査対象　　名古屋市立北一社小学校　第６学年　38 人

4　調査の結果と考察

(1)　社会の課題に対する意識はどの程度あるのか。

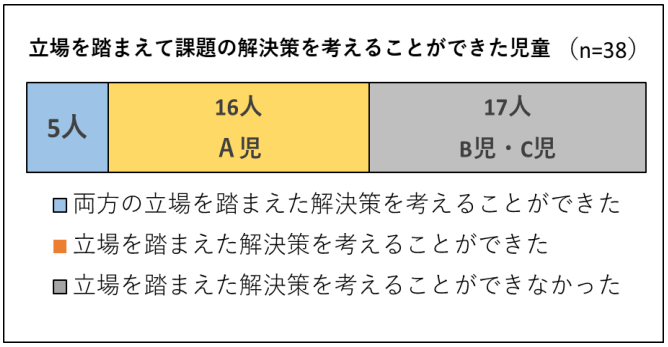
質問紙で、「①社会の課題に関心がありますか。」「②課題への解決策を考えようとしていますか。」を問い、その人数をクロス集計すると、右のような結果になった【資料４】。この結果、子どもが日常生活において得られる社会の課題について関心をもっている一方で、解決策を考えようとすることができていない子どもが一定数いることが分かった。社会の課題への関心をもつことはできているため、具体的な解決策を考えることができるよう、解決策を考えるための話合い活動を工夫する必要があることが明らかになった。

社会の課題に関心がある					
	はい	0人	5人 B 児	5人	6人 A 児
	どちらかというとはい	1人 C 児	4人	5人	7人
	どちらかというといいえ	0人	0人	2人	1人
	いいえ	1人	1人	0人	0人
		いいえ	どちらかというといいえ	どちらかというとはい	はい
	課題への解決策を考えようとしているか				

【資料４　社会の課題に対する意識調査】

(2)　社会の課題への解決策について、立場を踏まえて考えることができているか。

右のグラフは、単元「国の政治のしくみと選挙」において、「投票率が低いという課題を解決するためにどのような取組をしていくとよいだろう」という問いに対する子どもの答えを分類したものである【資料５】。国民や国といった立場を踏まえた解決策を考えることができなかった子どもが 17 人と最も多く、社会の課題への解決策を考えるために、立場を踏まえた解決策を考えるための手立てが必要であることが分かった。



【資料５　立場を踏まえて考えられたか】

一方で、「期日前投票を、人がたくさん集まる場所でできるようにすれば、国民にとって投票しやすくなると思う」など、立場を踏まえて解決策を考えることができた子どもが 16 人、「投票率の低さを解決するために、国がインターネットで投票できるようにすれば、国民の多くが利用して投票率が上がると思う」など、両方の立場を踏まえて解決策を考えることができた子どもは５人にとどまった。そこで、取組の改善点に着目し、課題に関わる立場にとってよりよい解決策を考えることができるようにするための工夫が必要であることが明らかになった。

Ⅳ　第１次授業研究（６月）

１　単元　　子育て支援の願いを実現する政治

２　目標

地方公共団体の政治について、政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりに着目して調べ、国民生活の安定と向上を図る大切な働きをしていることを理解する。また、社会の課題へのよりよい解決策を考えることができるようにする。

３　検証項目

(1)　「社会の課題への取組を追究する」段階において、PMI シートを活用した評価会議を行うことは、子育て支援の課題に対する取組について、立場にとって三つの項目の評価をする上で有効か、評価会議における PMI シートの記述内容からつかむ。

(2)　「社会の課題の解決策を考える」段階において、課題の解決策を考えるために未来会議を行うことは、子育て支援の課題に関わる立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を考える上で有効か、会議後の学習プリントの記述内容からつかむ。

４　実践の概要（７時間完了）

段階	学習内容
社会の課題を把握する	第１時 ○　名古屋市の子育て支援の課題について調べ、学習問題を設定する。 学習問題：名古屋市の子育て支援の課題を解決するには、どのような取組をするとよいのだろう。 第２時 ○　学習問題に対する予想を話し合い、課題に対する現在の取組を予想し、追究の視点を明らかにする。
社会の課題への取組を追究する	第３～４時 ○　議会のはたらき、費用の内訳や税金のはたらきについて調べる。 第５時 ○　課題に対する現在の取組を「PMI シート」を使って評価し、立場ごとの評価を検討する。【検証場面１】
社会の課題への解決策を考える	第６時 ○　評価を基に、よりよい解決策について話し合う。【検証場面２】 第７時 ○　学習問題に対する考えをまとめる。

５　第１次授業研究の結果と考察

(1) 検証場面１　「社会の課題への取組を追究する段階」第５時

Ａ児は、「子育て支援ブック」を選択し、「いざというときの連絡、相談場所が分かる（P)」「外国語版はダウンロード版しかない（M)」「利用している外国人はどのくらいいるのか(I)」などの評価をシートに記入した。評価会議では、家庭の立場についての評価を伝え合い、様々な場所で配布されていることは良い点になると捉え、新たな評価として取り入れていた【資料６】。評価会議を行うことで、家庭と行政の立場について三つの項目で評価をすることができた。

立場	P(良い点)	M(残念な点)	I(疑問・気になること)
家庭	・いざという時の連絡先、相談先が分かる。 ・子育ての負担や悩みが減り子育てを楽しめる。 ・様々な場所で配布されているため、気軽に手に入れることができる。（評価会議後付け加えた評価）	・外国語版での提供はダウンロード版しかできず、英語と中国語でしか見ることができない。 ・支援サービスを受けるために条件がいる。 ・制度の仕組みが複雑で分かりづらい。	・子育て支援ブックを利用している外国人はどのくらいいるのか。 ・実際に制度や支援を利用した人の声。 ・なごやっ子以外の子育て支援ブックは、なごやっ子とどのような違いがあるのか。
行政（市）	・子育てに対する印象を変えられる（楽しいと感じてもらえる。） ・相談の声などから、新たな支援をつくりやすくなる。 ・様々な場所で配布することで、取組を広めることができる。	・ページを作成したり修正したりするのに手間がかかる。 ・支援を展開するのに莫大なお金がかかる。 ・支援制度の数や種類に限りがある。	・どのくらいコストがかかっているのか。 ・子育て支援ができてから、子どもの人口はどう変化しているのか。 ・子育て支援企業が行っている取組はあるのか。

【資料６　評価会議後のＡ児の PMI シート】

Ｂ児は、「子育て支援アプリ」を選択し、「子どもが安全に楽しく遊べる場所や情報を簡単に検索できる(P)」「行政にとって運用に費用が掛かる(M)」「どうしたらもっと運用に掛かる費用を抑えられるのか(I)」などの評価をシートに記入した。利用率に疑問を感じ、評価会議で改善の可能性について話し合い、家庭の立場にとっての疑問を付け加えることができた【資料７】。評価会議を行うことで、立場にとっての評価を検討することができた。

立場	P(良い点)	M(残念な点)	I(疑問・気になること)
家庭	・子どもが安全に楽しく遊べる場所や情報を簡単に検索でき、利用者に必要な情報がすぐに手に入る。 ・子育て中の初めて行く場所でも困らない。 ・子育て相談をすることができる。	・インストールしないといけない。	・何人ぐらいの人が子育て応援アプリを利用しているのか。（評価会議後付け加えた評価）
行政（市）	・成長記録の共有が簡単なため、夫婦、家族の子育てを促すことができる。	・運用に費用が掛かる。	・どうしたらもっと運用に掛かる費用を抑えられるのか。

【資料７　評価会議後のＢ児の PMI シート】

Ｃ児は子育て課題に対する取組から、「なごやっ子応援制度」を選択し、「企業や地域が行政と連携している（P)」と家庭にとっての良い点の評価をしたものの、それぞれの立場にとっての残念な点を評価することができなかった。評価会議の際には、同じ取組を選択した子どもの評価を聞いたり、自分の評価を伝えたりしたが、評価後のシートには「どうしてぴよかという名前なのか」といった立場とは関係のない記述となり、立場にとっての評価をすることができなかった。

(2) 検証場面１での結果と考察

評価会議の結果		
Ａ（十分満足できる）	Ｂ（おおむね満足できる）	Ｃ（努力を要する）
課題に対する現在の取組について、複数の立場にとっての評価をすることができる。	課題に対する現在の取組について、立場にとっての評価をすることができる。	課題に対する現在の取組について、立場にとっての評価をすることができない。
19 人（Ａ児）	14 人（Ｂ児）	５人（Ｃ児）

子育て支援の課題に対する取組を PMI シートに評価し、評価会議で立場についての評価を話し合うことで、「自分の評価が立場にとって良い点となっているか」「自分が評価したことの他にどんなことが評価できるのか」といったことを確かめようという意識を生み、取組の課題に対する効果などを検討して、PMI シートを見直そうという姿が 38 人中 23 人に見られた。

一方で、項目Ｉ（疑問・気になること）について、Ｃ児のような「どうしてこの名称なのか」や、「支援アプリはダウンロードにどれくらい時間が掛かるのだろう」といった追究を進めれば分かることや、立場を踏まえた疑問や関心とは関係のない記述となっている子どもが見られた。これは、評価会議を通して、取組に関わる立場を意識せずに、それぞれの項目について話し合ってしまい、取組に関わる立場を基にした評価にならなかったからだと考える。

(3) 検証場面２　「社会の課題への解決策を考える段階」第６時

Ａ児は、名古屋の子育て支援の課題を解決するために、「子育て支援ブックの認知度を向上させることや、コスト面で改善することはできないか」などの必要性や疑問をもち、同じ取組を選択した子どもと、取組のもつ良い点や残念な点を共有しながら、未来会議を進めていった。会議では、グループの仲間の意見に積極的に質問したり、自分の考えを伝えたりした。解決策を考える場面では様々な解決策を述べ、学習問題に対する考えとして、「子育て支援ブックを多様な言語での発行をする」という解決策を考えることができた。

Ｂ児は、名古屋市の子育て支援の課題を解決するために、「アプリの運用に掛かる費用や利用する人を増やすこと」などの必要性や疑問をもち、未来会議を進めていった。手順に沿って話合いを行う中で、二次元コードを活用した配信をする解決策を考え、まとめることができた【p. 66 資料８】。

子育て支援の課題に対して、子育て支援アプリという取組が行われています。
この子育て支援アプリは、家庭の立場にとって、利用者に必要な情報がすぐに手に入るという良さがあります。一方、市（行政）にとっては運用に費用が掛かるという残念な点があります。
子育て支援の課題を解決したり、親の願いを実現したりするために、ポスターに二次元コードを付けてみんなに配信することで、市の立場にとって運用に費用が掛かるという残念な点を解消できると思います。
（改善点を踏まえた解決策）

【資料８　未来会議後のＢ児の学習プリント】

Ｃ児は、名古屋市の子育て支援の課題を解決するために、なごや未来っ子応援制度についての未来会議に参加し、グループの仲間の意見を聞いたり質問したりした。しかし、どのような解決策が良いかについて考えをまとめる際は、「家庭の子育て支援が楽になる」という記述にとどまり、立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができなかった【資料９】。

子育て支援の課題に対して、なごや未来っ子応援制度という取組が行われています。
子育て支援の課題を解決したり、親の願いを実現したりするために、ぴよかのカードを使うと家庭の子育て支援が楽になると思いました。

【資料９　未来会議後のＣ児の学習プリント】

(4) 検証場面２での結果と考察　　**欠席２名**

未来会議の結果		
Ａ（十分満足できる）	Ｂ（おおむね満足できる）	Ｃ（努力を要する）
複数の立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができる。	立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができる。	立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができない。
14 人（Ａ児）	16 人（Ｂ児）	６人（Ｃ児）

未来会議により、現在の取組の良い点や残念な点について効率的に話し合い、課題に関わる立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を具体的に考えることができた。

一方で、６人の子どもが、Ｃ児のように立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を考えることができなかった。これは、未来会議の手順の中に良い点や残念な点について話し合ったことを整理したり、よりよい解決策を考えるための準備をしたりする場がなかったためだと考える。

Ⅴ　長期研修で学んだこと

１　東京学芸大学教授　川﨑　誠司氏

川﨑誠司氏からは、本研究の「評価会議」は、課題に対する現在の取組を三つの項目で評価をすることで、現在の取組のもつ良さや残念な点だけでなく、よりよい解決策につなげることのできる取組そのものがもつ課題を発見することができ、改善点を自らつかむことにつながっていると教えていただいた。また、子どもが個々に評価した PMI シートを基に、「評価会議」を通して評価の内容について検討することは、課題に対する現在の取組の評価を子ども同士の中で共有でき、思考の比較をすることができるため、協働的に学ぶことができるようになっていると教えていただいた。その一方で、PMI シートの項目にある「I（気になること・疑問）」は、他の二つの項目「P（良い点）」「M（残念な点）」に比べて子どもが思考しにくい項目であり、考えを表現しにくいものであるとの指摘をいただいた。

以上の指導・助言を踏まえ、第２次授業研究では、「評価会議」において、評価がより具体的になるように、課題に関わる立場ごとに評価した内容をそれぞれ話し合うようにする。また、PMI シートの項目「I（気になること・疑問）」を考えられるように、課題の解決策につながることを意識して評価するようにする。

２　筑波大学教授　唐木　清志　氏

唐木清志氏からは、本研究における「未来会議」は、評価会議で使用する PMI シートの評価項目と未来会議の手順にある「良い点」「残念な点」が共通しているため、評価会議での個人の評価を未来会議において協働的に検討することで、相乗効果によってよりよい解決策を考えることにつなげることができると教えていただいた。一方で教師が時間や手順を制限することは、子どもの思考の流れや深まりを妨げてしまうことにつながるため、「未来会議」の進行や会議の展開を子どもに任せ、主体的に行うことで、よりよい解決策を考えることにつながると教えていただいた。

以上の指導・助言を踏まえ、「未来会議」において、検討したことを整理する手順を新たに加えることで、その後の解決策を考えやすくするようにする。また、進行や会議の時間を子どもが一部決められるようすることで、解決策を考える時間を十分に確保できるようにする。

Ⅵ　第２次授業研究に向けての改善点

１　検証項目１について

「評価会議」を行う際の会議の進め方において、立場ごとの評価について話合うように順序立てることで、立場を踏まえた評価を検討できるようにする。

２　検証項目２について

「未来会議」の手順の中に、黄（良い点）と黒（残念な点）を話し合った後に、新たに青（立場ごとに整理する）を手順に加えることで、解決をすべき改善点について、立場を踏まえて考えることができるようにする。

Ⅶ　第２次授業研究（10 月）

１　単元　　世界の未来と日本の役割

２　目標

世界の諸課題に対する国際連合の働きや日本の現在の取組について調べ、現在の取組を評価したことを基に、よりよい解決策について考えさせることで、世界の平和の実現のために日本が国際社会に果たす役割について考えることができるようにする。

３　検証項目

(1)「社会の課題への取組を追究する」段階において、「評価会議」を立場ごとの評価について話合うように順序立て行うことは、世界の課題に対する取組について、立場にとっての三つの項目の評価をする上で有効か、評価会議における PMI シートの記述内容からつかむ。

(2)「社会の課題の解決策を考える」段階において、「未来会議」の手順の中に、新たに青（立場ごとに整理する）を加えることは、世界の課題に関わる複数の立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を考える上で有効か、会議後の学習プリントの記述からつかむ。

４　実践の概要（８時間完了）

段階	学習内容
社会の課題を把握する	第１時 ○　世界の諸課題について調べ、学習問題を設定する。 学習問題：世界の様々な課題を解決するには、日本はどのような取組をするとよいだろう。 第２時 ○　学習問題に対する予想を話し合い、課題に対する現在の取組を予想し、追究の視点を明らかにする。
社会の課題への取組を追究する	第３～５時 ○　国際連合の特色や国連機関、日本の取組や NGO・ODA の取組について調べる。

	第６時 ○　課題に対する現在の取組を「PMI シート」を使って評価し、立場ごとの評価を検討する。 【検証場面１】
社会の課題への解決策を考える	第７時 ○　評価を基に、よりよい解決策について話合う。　【検証場面２】 第８時 ○　学習問題に対する考えをまとめる。

５　第２時授業研究の結果と考察

(1) 検証場面１　「社会の課題への取組を追究する段階」第６時

Ｂ児は、JICA の取組から「みんなの学校プロジェクト」を選択し、JICA にとって「教育にとどまらず様々な分野に影響を与えられている」、現地の子どもにとって「基礎学力が飛躍的に向上した」、地域の人にとって「地域全体で子どもの学びを支えることができている」など、立場ごとの評価をシートに記入した。JICA の立場にとっての評価を検討する場面で、プロジェクトの開始時期や費用について疑問をもち、評価会議に改善の可能性について話合い、JICA にとっての疑問になると評価に付け加えることができた【資料 10】。このように、立場ごとに評価について検討することで、取組に関わる複数の立場について三つの項目で評価し、PMI シートにまとめることができた。

立場	P(良い点)	M(残念な点)	I(疑問・気になること)
JICA	・地域の教育にとどまらず、栄養改善や衛生管理といった分野にも活動が広げられる。	・プロジェクトの推進によって地域の伝統を壊してしまうおそれがある ・費用が掛かる。	・どれくらい地域の人の役に立っているのか。 ・もっと早くプロジェクトを進められなかったのか。 （評価会議後付け加えた評価）
現地の子ども	・学力が飛躍的に向上した。 ・就学率や留年率、教員の出勤率が改善した。	・通いたくても通えない子どもが一定数いる。	・貧富の差を感じさせないようにするにはどうすればいいだろう。
地域住民	・保護者や教員だけでなく、地域住民たちが教育の重要性を理解して地域全体で子どもの学びを支えることができる。	・村の権力者が学校運営委員会の代表を務めることが多かったため、透明性が確保できず不信感があった。	・運営委員会の代表が公平に務まるようにするにはどうすればいいのだろう。

【資料 10　評価会議後のＢ児の PMI シート】

Ｃ児は JICA の取組から、「青年海外協力隊」を選択し、JICA にとって「派遣される人の技術を生かせる (P)」「現地で危険な目にあうことがある(M)」「短い時間で本当に貢献できるのか(I)」と三つの項目で評価した。評価会議の際には、同じ取組を選択した子どもの評価の理由を尋ねたり、自分の評価の違いを伝えたりして、自分の評価を見直すことができた。評価会議をすることで、立場を基に評価をすることができた。

(2) 検証場面１の考察

評価会議の結果		
Ａ（十分満足できる）	Ｂ（おおむね満足できる）	Ｃ（努力を要する）
課題に対する現在の取組について、複数の立場にとっての評価をすることができる。	課題に対する現在の取組について、立場にとっての評価をすることができる。	課題に対する現在の取組について、立場にとっての評価をすることができない。
26 人（Ｂ児）	９人(Ｃ児)	３人

Ｂ児は評価会議の中で、立場ごとに取組の良さや残念な点について伝え、同じグループの仲間と検討する姿が見られた。そのため、自分の評価と仲間の評価を比較したり、評価の理由について詳しく知ったりすることができ、自分の評価を見直して複数の立場を踏まえた評価をすることができた。Ｂ児のように複数の立場を踏まえた評価をすることができた子どもは 38 人中 26 人になった。また、Ｃ児のように立場を基に現在の取組を評価することができた子どもが 38 人中９人になった。この結果から、評価会議において、現在の取組の評価を伝え合うだけでなく、立場ごとに検討したことで、「この立場にとっての良い点や残念な点になりうる」といった、それぞれの立場について順序立てて検討する姿に至ったと考える。

(3) 検証場面２　「社会の課題への解決策を考える段階」第７時

Ｂ児は、教育の課題を解決するために、みんなの学校プロジェクトにおいて、「村の権力者が運営に携わることで不信感や不透明感が強くなることや、公平性をもたせるにはどうしたらよいか」などの残念な点や疑問を解決したいと考え、同じ取組を選択した子どもと、取組のもつ良い点や残念な点を共有しながら未来会議を進めていった。会議では選択した取組の良さや残念な点について積極的に考えを述べたり、仲間の意見に質問したりして、必要なことをメモした。立場ごとに整理する手順の場面では、話し合いを通して共有した残念な点や疑問点などを改めて伝え合い、よりよい解決策を考えることへつなげることができた。複数の立場を基にして解決策を考え、地域住民にとって、プロジェクトを公平に進めるために、関係者の意見を公平に集約し、運営に取り入れる仕組みを作ることや、子どもにとって参加する子どもの保護者も一緒になって学ぶ機会をつくるという解決策を考えることができた【資料 11】。

> 世界の様々な課題の中で、教育の課題に対しては、JICA の「みんなの学校プロジェクト」という取組が行われています。
>
> このプロジェクトは、現地の子どもにとって、基礎的な学力を高めることができたという良さがあります。一方、プロジェクトの委員会で地域の権力者が妨げになる慣例を取り入れてしまうという残念な点があります。
>
> 教育の課題を解決するために、地域の住民にとって、みんなの学校プロジェクトの関係者の意見を公平に集約する仕組みや、保護者も一緒になって学ぶ機会をつくるようにしていくことで、更によいプロジェクトになると思います。

【資料 11　未来会議後のＢ児の学習プリント】

Ｃ児は、青年海外協力隊の取組について「JICA の支援が届いていない地域にどのように支援することができるのか」などの疑問をもち、未来会議を進めていった。手順に沿って話合い、立場ごとに整理する場面では、JICA の立場について整理し、よりよい解決策を考えることにつなげることができた。解決策を考える場面では、JICA にとって、複数の国で支援をするチームを立ち上げて教育を中心に活動をするという解決策を考えることができた【資料 12】。

> 教育の課題に対して、JICA の「青年海外協力隊」という取組が行われています。
>
> 現地で活動する協力隊にとって、自分のもっている技術が生かせたり、地域の教育の問題点を解決できたりすることが良いと思います。しかし、地域によっては支援を受けられていない場所があります。JICAにとって、他の国とチームを立ち上げて活動することで多くの国が関わることができ、支援できる地域が増えると思いました。
>
> （改善点を踏まえた解決策）

【資料 12　未来会議後のＣ児の学習プリント】

(4) 検証場面２での結果と考察

評価会議の結果		
Ａ（十分満足できる）	Ｂ（おおむね満足できる）	Ｃ（努力を要する）
複数の立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができる。	立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができる。	立場の改善点を踏まえた解決策を考えることができない。
24 人（Ａ・Ｂ児）	12 人（Ｃ児）	２人

未来会議に新たに立場ごとに整理する手順を加えたことにより、話し合ったことを立場ごとに整理し確認することで、どのような改善点を具体的に解決策につなげれば良いかが明確になった。Ｂ児のように、複数の立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を具体的に考えることができた児童が 38 人中 24 人となった。また、Ｃ児のように、課題に関わる立場の改善点から、具体的に解決策を考えることのできた児童が 38 人中 12 人となった。このことから、未来会議において、それまで話し合った内容を整理することで、「立場ごとの改善点をどのように解決すればよりよい解決策になるか」を、子どもたちが明確に把握することができ、立場ごとの解決策を考える姿に至ったと考える。

一方で、２人の子どもが立場の改善点を踏まえたよりよい解決策を考えることができなかった。会議で話し合ったことをまとめる際に、立場にとっての改善が必要な内容を再度確かめ合い、立場の改善点と解決策をつなぐことができるようにする必要がある。

Ⅷ　研究のまとめ

１　研究から明らかになったこと

⑴　社会の課題に対するよりよい解決策を考える子どもの育成

授業研究を通して、38 人中 36 人の子どもが、課題に対する現在の取組の評価を基にして、よりよい解決策について、課題に関わる立場の改善点を踏まえて考えることができた。また、38 人中 24 人が課題に関わる複数の立場の改善点を踏まえて解決策を考えることができた【資料 13】。このことから、課題に対する現在の取組について評価することは、立場にとっての改善点を捉えることができることが明らかになった。そして、評価を基に、シックスハット法の手順を取り入れた、話合い活動は、社会の課題に対するよりよい解決策を考える子どもを育てる上で有効であるということが明らかになった。

立場の改善点を踏まえた解決策を考えている。		
第1次授業研究		
複数	一つ	立場なし
14人 A児	16人 B児	6人 C児
↓		
第2次授業研究		
複数	一つ	立場なし
24人 A児　B児	12人 C児	2人

【資料 13　子どもの変容】

⑵　社会の課題を捉え、その解決に向けて、評価し解決を目指そうとする子どもの姿

第２次授業研究後には、世界の様々な課題について、解決を目指したい課題を選択し、よりよい解決策を考える活動を行った。子どもは、学習したことだけでなく、ニュースや新聞などで取り上げられている時事問題にも目を向け、従来の課題にとどまらず、新たな課題にも興味をもつ姿が見られた。

Ａ児は、紛争問題についての現在の取組について調べ、PMI シートを使って評価した。国際連合の話合いの仕組みについて「加盟国が対等な関係で意見を伝え合うことができる(P)」「常任理事国が拒否権を使って対立している国の意見を取り入れようとしない(M)」「拒否権をなくすことはできないのだろうか(I)」といった評価を行った。同じ課題に興味をもった子どもと二つの会議を行い、解決策を学習プリントに記述した【資料 14】。このように、社会に見られる課題に興味をもち、取組を評価して、よりよい解決策を考える姿が見られた。授業研究を通して、様々な課題の解決を目指そうとする子どもを育むことにつながることが分かった。これは、既存の解決策で本当に解決できるかどうかを評価し、課題に関わる立場を踏まえて、複数の視点でよりよい解決策を考える学習の流れにより、社会的事象を自分事として捉え、自分の考えを明確にできるように追究できたからだと考える。

(前略)世界の平和や安全のために、紛争を予防する仕組みや起こったとしてもすぐに収束できる環境を国連でもち、拒否権のない、どの国も対等に話し合える組織となることが必要だと思います。

【資料 14　Ａ児の学習プリントの記述】

２　今後の研究に向けて

本研究では、社会の課題に対して「現在の取組で本当に解決できるのか」という問いを出発点として、取組を三つの視点で評価し、シックスハット法の手順を取り入れた話合い活動を行うことで「社会の課題へのよりよい解決策を考える子ども」を育てることができた。子どもたちが社会の中心となって活躍する 2040 年代には、既存の解決策だけでは対処できない新たな課題に直面することが予想される。どのような課題であっても、子どもたちが課題ごとの取組を評価し、話合いを通してよりよい解決策を考えられるよう、社会科の学習において今後も研究を進めていきたい。

参考・引用文献　澤井陽介　唐木清志『小中社会科の授業づくり』東洋館出版社(2021)